ISSN 0388-5569

LIBRARY NEWS

山口大学附属図書館報

Yamaguchi University Library Bulletin

2001.MAR

Vol.21 No.3

新　世　紀　に　思　う

附属図書館長　小　嶋　直　哉

子どもの頃に、人並みに健康であればやがては自分も21世紀を迎えるであろうことを想像はしていた。しかし、それは単に年齢から計算しただけのことであり、その時の自分の姿や、どのような情勢で新世紀を迎えるのかについては、当然のことながらとんと見当もつかず、いわばそれはずっとずっと遠い、まるでＳＦ世界の出来事のようであった。

人生の半ばを過ぎた時点において、百年に一度である新世紀の始まりの時を迎えることができたことは、誠に得難い体験ではあるけれども、果たしてどれだけの人が希望と期待に満ちた気持ちで、新年を迎えたのであろうか。むしろ多くの人々は、新世紀に対する期待と共に、遠くから迫り来る一種の不安感、閉塞感を拭い去ることができなかったのではないだろうか。この感覚の近因は、我が国の経済、政治、教育の状況とそれを内包する社会の新しい価値観の未形成であり、遠因は地球という環境が有限であることを実感せざるを得なくなってきたことではないだろうか。

21世紀においても、科学の進展なくして人類の生存はあり得ないことは、その功罪は別としても、既にこの地球上に60億以上の人々が生活している現実からも容易に想像できる。多くの科学技術の進展にはそれぞれ方向性があり、幾分か調整することは不可能ではないであろうが、その大きな流れは変えられないように思う。情報技術と情報利用の高度化の進展も、その一つであろう。

情報技術の生活環境への普及は、日本ではやや遅れて1995年頃から顕著であり、この年はＩ

Ｔ革命元年と呼ばれている。情報技術は、日常生活に密着した応用技術を含めると、極めて幅の広い領域にわたり、かつ社会への影響も大きい。他の国に比べてＩＴ利用で突出している移動体通信（モバイル）での展開は、典型的な例である。

社会を構成する集団の一つである大学も、高度情報化への流れは避けられないのは当然である。このようなとき、本学は大学の理念「発見し、はぐくみ、かたちにする」を制定した。これを受けて、附属図書館においても理念・目標と具体的活動項目を検討しつつある。その中では個人の視点を重視したものとしたいと考えている。講義や研究、あるいは図書等によって得られた知識も、それぞれの個人の思索により意味づけられ、体系化されることによって初めて、個人の活動を規定する知恵となり得ると考えるからである。このような思索において、既成の枠を超えて行く自由な精神と自己実現への意欲を持ち続けることが、個人の観点からの創造的な活動の源ではないだろうか。

一方、創造的活動を生み出す社会の観点からは、多様性を許容することから始めなければならないと思う。金子みすゞの詩「わたしと小鳥とすずと」は、「みんなちがう」からこそ「みんないい」とも理解できるが、他者とちがう「わたし」を肯定的に受け入れる苦しみと安らぎとを感じるのは、小生だけであろうか。この詩は小学校の先生達の間では人気No.1の詩ではあるが、現実の学校においては学級経営の名の下に、ややもすると他者と違うことが「しつけ」の問題と矮小化されることが、しばしばあるやに聴いている。同じであることを強調する社会的風土は変わっていない。

筆者は専門科目の講義の中で、多様性を包含する系は柔軟性に富み、且つ大規模な変化に対する適用性が高いことを「ディーゼルエンジンの混合気形成と燃焼」の項で必ず触れることにしている。いろいろな例を示して説明しているにも拘わらず、レポートや解答の多くに「均質であるから良い」との記述が多く見られ、がっかりする。どうも日本人の遺伝子には、同一性ないしは均一性信仰とも言える情報が書き込まれているようである。

学期の最後の授業で、学生に匿名で授業評価をお願いしている。その意見欄には、人間の持つ暗さが仮面をはずして顔を見せるようなメッセージが、１～２名から必ず届けられる。情報社会には、偏狭で人間本性の暗い面をもつ強大なエネルギーが顕在化しやすい特性がある。またこれらは、偏狭であるが故に情報操作されやすいという特性も持っている。筆者はこのようなエネルギーを、「うけ」や「のり」だけで乗り切っていこうとする一部の若者達の行動よりも、むしろ肯定的にとらえるべきものと考えているが、同時に社会に対して破壊的であることは言うまでもない。

多くの難問を内包する情報化技術という文明を、次の世紀に伝えるべき文化として、どのように咀嚼し、いかに定着させるかが問われているのだと思う。この点で大学における教育においては、従来の文系・理系という考えを超えた、新しい教養教育の概念がますます重要になると思っている。また、情報化により急激に展開する社会変革を目前にして、我々は所属する集団の当面の利害を乗り越えて行動する想像力と論理を身につけられるのであろうかとも思う。いずれの問いに対しても、まだその答えの道筋は見えてこない。

附属図書館は、いろいろな目的を持って山口大学に集う人々に対して、多様な観点からの情報を提供し、互いに交流し、自らを考える場を提供することにより、「知の広場」を支える一翼を担って欲しいと思っている。

新世紀を迎えて思いつくままに書いてはみたものの、独断と偏見の固まりのような内容になってしまった。くれぐれもご笑覧の程、お願い申し上げる。

（附属図書館長　こじま・なおや）

魅力ある図書館（その２）

附属図書館運営委員会委員　太　田　　聡

私は、山口生まれでもなければ、山口大学が母校という訳でもないが、山口大学がとても好きである。山口大学に惚れ込んでいるし、構成員の一人であることをとても誇りに思っている。しかし、まただからこそ、山口大学に期待することや不足に思うことも人一倍多い。以下では、特に附属図書館本館に関して不満に思うことなどを、（多分に無知から来る誤解も含まれていようが、愛情を込めて）書き連ねてみる。

図書の開架について

例えば、受験生の多くが利用する「大学入試シリーズ」（いわゆる「赤本」）の2001年版『山口大学』を見ると、施設の欄で附属図書館は「（本館と分館合わせて）蔵書数は約160万冊・学術雑誌は26,000種にのぼり、これは国立大学の附属図書館の中でも有数のものである」と紹介されている。また、例えば、『大学ランキング2001年版』（朝日新聞社刊）の中にある「大学図書館ランキング」を見ても、蔵書・受入冊数、雑誌種類、貸出数、図書館費の総合評価において、山口大学附属図書館は国立大学の中では13番目という誇るべき位置に付けている。こうした数字だけを見ると、実物を知らない人は、膨大な数の図書が並ぶ巨大な図書館を想像するかもしれない。私自身も、山口大学への赴任前に、数字だけから山口大学の図書館はとても充実しているのだろうと想像し、嬉しくなった記憶がある。ところが、はじめて附属図書館本館に入ったときの感想は、正直なところ、「あれっ、たったこれだけ？」だった。そう、「蔵書数は全国有数」と言っても、それは、「全学に分散している図書をすべて合わせればそうなる」という意味であって、残念ながら「附属図書館の中に皆が自由に閲覧できる状態で100万冊以上並んでいる」いう意味ではない。

山口大学附属図書館本館（以下「本館」と略す）のみの蔵書数は60万冊強である。が、このうちのおよそ半数は、許可を得なければ閲覧できない特殊資料室や貴重書庫、保存書庫に収められている。そして、残りのさらに３分の２も書庫に収蔵されているので、本館閲覧室に開架されている図書は10万冊足らずである。

蔵書検索の結果、収蔵場所が「書庫」と表示されれば書庫内をお目当ての図書を捜して歩くが、そうでなければ、図書館利用者は閲覧室に開架されている図書を主に利用するものである。しかるに、その閲覧室の図書が少ないのでは、貧弱な図書館という印象を持たれても致し方あるまい。私の希望としては、本館には、閲覧室部分の充実をぜひお願いしたい。なにも、閲覧室に書庫の本を全部出してしまえとか、書庫の周りの壁を取り払ってしまえというような乱暴な主張をしたい訳ではない。ただ、開架閲覧室と書庫をことさら区別するような案内・表示や図書の配列を避けて、利用者が書庫の図書も開架閲覧室の図書と同じ感覚で利用できるような工夫をして頂きたいのである。私の学生達に尋ねてみても、「書庫には古い本しかない」というイメージがあるので、検索して収蔵場所が「書庫」と表示されない限りは、書庫には入らないそうである（実際には、閲覧室にもかなり古くさい本が並んでいるのだが……）。

しかし、この書庫こそが、私には実に魅力的な空間である。なぜならば、教官研究室から返却された専門書がこの書庫に収められるからである。はっきり言って、開架閲覧室に並ぶ図書よりも、よほど専門的で価値の高いものもあ

る。特に洋書の場合はそうである。また、最近退官された先生方の研究室から返却されたものであれば、新しい本も多く含まれており、実に貴重なコレクションである。であるからこそ、こうした図書を、「書庫にある本」というレッテルを貼られた日陰者にしてしまうのではなく、学生達の目にも留まりやすい存在にして欲しいのである。

図書の開架ということに関連してもう一つ気付いたことを挙げると、本館２号館の１階はいわゆる電動集密書架が導入されて、少ないスペースでも多くの資料を収蔵できている。が、図書館の１階は半地下状態で、実に湿っぽい空間である。温度や湿度を常に一定に保つほどの設備は導入されていないので、よく見ると多くの本にカビが生えている。いくら効率よく収蔵できても、これでは本がかわいそうである。まだ風にも陽にもあたる場所で過ごせた方が、たとえ日に焼け、手垢をつけられ、ぼろぼろになっても、薄暗い空間で人知れずカビだらけになって朽ちていくよりも、本も本望であろう。（同様に、教官研究室から返却されても、館員の人手不足で整理が追い付かず、２号館５階の保存書庫の片隅に段ボール詰めされたまま置かれている本達を見るにつけても、「早くこの『本の墓場』から出してやりたい」と思うのは私だけであろうか？）開架閲覧室にはまだスペースの余裕がある気がするので、もう少し書架を増設してでも、しまい込まれてしまった不遇な図書達が少しでも多く日の目を見ることができるような工夫をして頂きたい。

図書の配列・配置について

次に、本館利用者の多くが最も不満に感じることの一つは、開架閲覧室にしても、書庫にしても、図書が背に貼られたラベルの記号通りに並んでいないことであろう。日本十進分類法に従って、例えば、語学の中の英語関係は830番台というようなところまではすぐにたどり着けても、その後が問題である。本来ならば著者記号のアルファベット順に並んでいるはずなのに、どんな基準があったのかさっぱり分からなくなっている。結局、借りたい本に巡り会うには、偶然目に留まるまでそのあたりを端から端まで丹念に見ていくしかない状態である。月末や春季・夏季休業期間中に設けられた館内整理日に、図書館職員の方々がどんなに一生懸命整理をしても、図書の配列がめちゃくちゃという情けない状態が続くのは、利用者側のモラルの低さも原因であろう。が、故意に配列を乱そうとしている訳ではなくても、どの棚から抜いたのかが分からなくなることは誰にでもある。そのような場合に備えて、返本台等の利用を促すなどの工夫が必要であろう。また、図書館利用に関する徹底したオリエンテーション（例えば、学部単位の大人数で適当にやるのではなく、授業単位くらいの少人数で、検索方法などの便利なことばかりを教えるのではなく、利用モラルもしっかり認識させるなど）の実施も必要であろう。

それから、本館の図書の配架に関して首を傾げたくなるもう一つのことは、同じ著者や同じ分野の本が全く違う場所に置かれていることである。例えば、Chomskyの書いた言語学関係の洋書が２号館１階の集密書架にも、２号館２階の雑誌閲覧室の横にも、そして書庫の５階にもあるといった具合である。これには、おそらく購入・返却時期や購入費目の違いなどの複雑な事情が関係しているのであろう。が、同種の本が館内で分散しているというのは、利用者にしてみれば実に利用しづらいものである（存在に気付かずに終わることも間々ある）。やはり同じ著者や分野の本は同じ場所に並べておくべきであろう。また、関連図書がズラリと一箇所に揃っている方が、たとえ総計は同じ冊数であっても、資料がより充実しているという印象も受ける。気の遠くなるような作業になるかもしれないが、ぜひ本館内の図書資料の総並べ替えを敢行して、関連資料はなるべく同じ箇所に並んでいるという状態になるように努めて頂きたい。

館内環境に思う

実験講座の多い理系の学部では、学部生にも各ゼミ単位で研究室や机が与えられるものであるが、純文系学部の我が人文学部では教室や研究室不足が深刻で、学生用の部屋も情けないほど少ない。例えば、私の所属・担当している人文学部の英米語文化論コースと大学院の英米語学文学論専攻の学生数は合わせればほぼ100名であるが、彼（女）らに与えられているのは36㎡の一部屋だけである。院生専用の研究室もない。こんな狭苦しいところに大勢が出入りしては、とても落ち着いて勉強などできないし、「研究室」とは名ばかりで、単なる雑談ルームに化すのもいかんともしがたい。そうなると、真面目に勉強したい学生は自分の部屋に帰るか図書館に逃げるように行くしかなくなるのだが、その図書館がはたして勉強するに相応しい環境を十分に整えているかと言うと、私には疑問符がちらつく。専門書の多くは、既述のように各学部の研究室や書庫などに分散しているので、本館内だけでは十分とは言えない。専門文献の不足に関しては、集中管理の進んでいない現段階では、致し方ないこととしよう。しかしながら、それ以外の部分ではより一層の環境整備を進めて、上述の人文学部生のように研究スペースに恵まれない学生達のためにも、本館が快適に勉強できる場になるようにぜひ改善に取り組んで頂きたい。

まず、周りに邪魔されたり周りを気にしたりせずに集中して勉強できるためにも、例えば、院生には研究個室を本館内に設けて欲しいものである。それが無理ならば、せめて、一人掛けの机を増やすとか、机と机の間にパネルやパーティション（仕切り）を設けるなどして頂きたい。また、照明に関して言えば、閲覧室の中の特に窓から離れた奥の方では、読書をするには暗すぎると感じる。できることなら、各机やテーブルにタスクライト（蛍光灯スタンド）を付けて頂きたい。節電の大切さは理解できるが、読書に適した明るさくらいは確保すべきではないだろうか。

そして、最も強く要望したのは、冷暖房、特に夏場の冷房をケチらないことである。知の探求の場である大学の図書館には冷房くらい入っていて当然至極のはずであるのだが、残念ながら我らが本館は、信じられないことに、真夏でも冷房が入らないことがしばしばである。人文学部の研究室で扇風機の前で勉強をしていたある学生のもらした「図書館に行っても、冷房がちゃんと利いてなくてかえって眠くなるから、こっちの方がまだましです」という愕然とするような言葉も蘇ってくる。中国電力との契約の関係で、夏場の電力消費を押さえなくてはならない事情は私も承知している。が、だからといって、図書館までが、他の部局と同様に、エアコンの運転停止時間帯を割り当てられるのは行き過ぎではないだろうか。これほどエアコンが普及した時代に、20年以上前ですら当然のように冷房の入っていた図書館が、今では実に不快指数の高い空間になっているというのは、なんとも解せない話だ。

前号の館報の拙稿で、「図書館はその大学の質のバロメーターだ」といった私見を記したが、それからすれば、今の本館の状態は、山口大学が三流大学である証としか私には言い様がない。学長がいくら「超一流大学」を唱えても、どんなに様々なおもしろいプロジェクトが打ち出されても、全学共通の知の宝庫・学びの場である図書館が単なる倉庫程度にしか捉えられていなくては、山口大学も底が知れているのである。図書館だけは電気を（浪費はもちろんいけないが）惜しまず使える聖域として予算措置がなされることを願うばかりである。本部のエアコンを全部止めてでも、図書館で学生達が快適に学習できるような環境を実現して頂きたい。

（おおた・さとし）

―次号へ続く―

特集／電子化から電子出版へ

図書館活動情報データベースの公開

岡田　隆・赤野　徹

図書館活動情報データベースの果たす役割

平成11年度末に館内に「デジタル概要プロジェクト」（主査・中野情報管理課長、参加メンバー総勢15人）が発足し、その作成の過程で生まれ、育てたのが「図書館活動情報データベース」です。附属図書館広報委員会の承認を終え、21世紀を迎えた平成13年１月９日付けで正式に公開しています、

このプロジェクトは、本学の理念「発見し、育み、形にする知の広場」に基づいて、図書館はどうあるべきかを考え、「ためる、つかう、つくる」の情報サイクル（別名「知識のおむすび」）活動を基本コンセプトとしています。

具体的には、「電子化から電子出版へ」、従来の冊子体からの電子化ではなく、最初から電子出版用にコンテンツを作成、編集して、情報の創造、共有、配信をしようというもので、コンテンツは、「図書館概要」を軸に、サービス系の案内情報等を盛り込んでいます。

たとえば、トップページのメニュー（下図↓参照）のうち、利用案内やマニュアル、チャレンジTheペーパーレスは、従来は冊子であったものの電子化です。また、山口大学放送局・図書館支局は、BBC・CNNニュースや放送大学のネットワーク配信及びＶＯＤを扱っています。

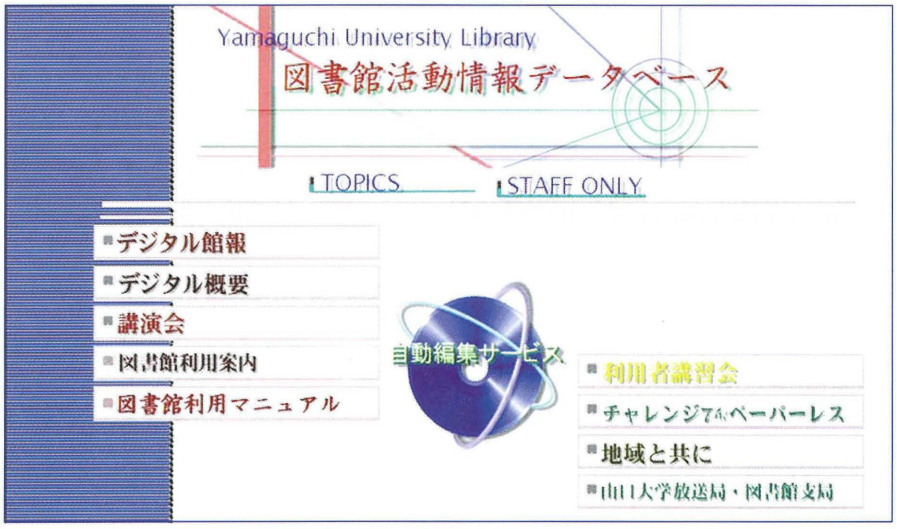
冊子体と違って、自由な更新が可能となるので、利用者サービスの向上だけでなく、自己点検・第三者評価等の情報源としても大いに期待されるシステムになると考えています。

図書館の利用案内やマニュアル等をこのような電子出版形式で刊行することのメリットとしては、次のような点が挙げられます。

・変更が発生する都度、即時更新が可能ため最新情報を提供できる。
・様々なリンク形成が可能なため、相乗効果による便利な案内へと変貌できる。
・どうしても印刷したい利用者用にＰＤＦ版を用意することにより、印刷の節減効果が期待できる（館内に印刷専用機器を用意）。

このようにコンテンツを蓄積していく過程でこれを共通教育で実施されている情報リテラシー教育の補助資料として活用する方向につい

URL=http://kiheitai.lib-c.yamaguchi-u.ac.jp/



ても検討中です。情報検索に関して、図書館員が直接授業の支援を行うということも意義のあることですが、われわれは情報系授業のシラバス支援のためのコンテンツを図書館が作成することも大切ではないかと考えています。

デジタル概要

山口大学附属図書館では、これまで隔年に冊子体の概要を発行（更新）してきました。

平成12年度刊行から冊子体での発行を中止し、電子版のみでの刊行を行うべく「デジタル概要プロジェクト」の立ち上げ準備を行ってきました。前に述べた図書館活動情報データベースはその中で生まれたものです。

電子化といっても、目次は写真のように、一見大きく変わってはいませんが、内容的には冊子体とは趣の違ったものになっています。

例えば「整備・改善の歩み」では、昭和24年以降実施してきた整備改善状況を図書館の機能を中心に項目を立てて分類整理し、一覧できるようにしています。

また、統計調査は『大学図書館実態調査結果報告』の最近10年分のデータを基に、基盤サービスと利用サービス部門に分けて、データ表の表示と効果的なグラフ化を行い、平成10年度分については全国の集計データと比較できるようにしています。図書館利用状況の変遷や図書館サービスの現状を把握することができるため、現時点での本学のサービスの実態を判断するための基礎的な情報源として活用できます。

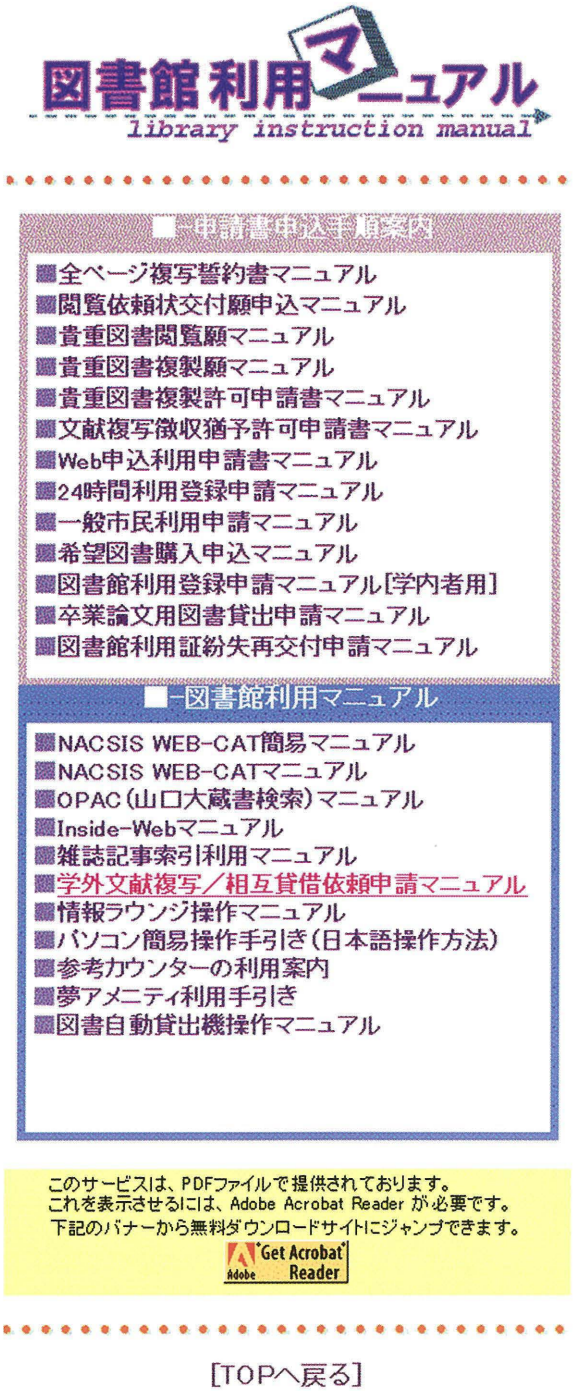
今後の計画

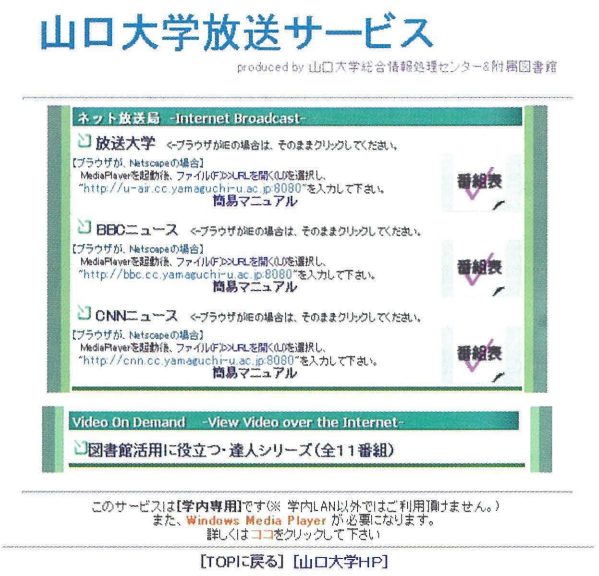
このような実践を通して、現在集計中である自己点検評価アンケートの結果を含めた評価報告書を電子出版で出すことができればと考えています。電子出版ならではの利点として、他で作成したコンテンツの使い回しが可能な点があります。例えば「概要」で作成した各種統計類や講習会・講演会等は、そのまま「評価報告書」でも使うことが可能です。

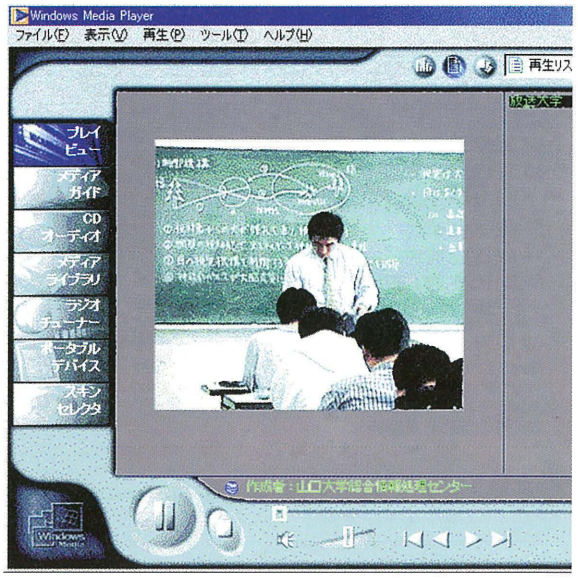
ただ、概要の性格上、来館者等への配布用として、千頁に及ぶコンテンツから重要部分を凝縮した簡易のＰＤＦ版を用意する予定です。

また、CD-ROMによる配布も計画中です。このような「視点を変えた図書館活動」を行う基盤として、デジタル概要をはじめとする、この図書館活動情報データベースを成長させていきたいと思っています。

（情報サービス係長　おかだ・たかし）







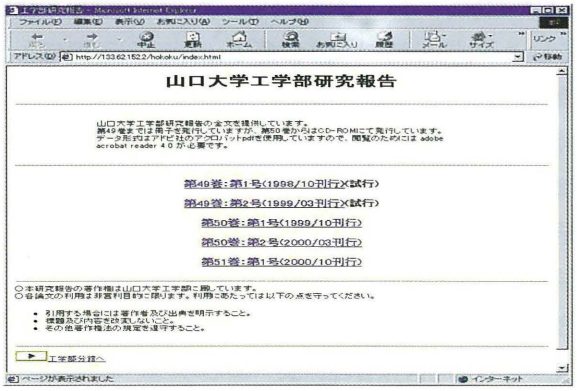
チャレンジ・ザ・ペーパーレス
—「山口大学工学部研究報告」の電子化—

図書館活動情報データベースのコンテンツのひとつであるチャレンジ・ザ・ペーパーレスは、本学が生産する学術的な著作物、紀要や修士論文・博士論文、貴重書目録等の電子出版をめざしています。現在提供している「山口大学工学部研究報告」は工学部の紀要で、従来、工学部分館が編集刊行業務を担当してきたものです。

本「研究報告」は、「山口大学工学部学報」（1950年刊行）に始まり、1964年に現誌名に変更、1997年に「Technology reports of the Yamaguchi University」を吸収、以来出版を続けてきましたが、1999年度（第50巻）から、冊子体による出版を止め、図書館のホームページへの掲載とCD-ROMによる出版に切り替えました。同時に、それまで年2回（10月と3月）の発行でしたが、CD-ROM化により年１回（3月）の発行としました。

ＰＤＦの採用

CD-ROM出版ではPDF（Portable Document Format）を用いました。このPDFはグラフィック的あるいはタイポグラフィ的に複雑な文書も保管でき、レイアウトは、ディスプレイ上でも印刷でも確実に保たれ、HTML形式のように表示環境によってレイアウトが変わるということはありません。PDFの文書を閲覧するためには専用のビューアソフトAdobe Acrobat Reader（v. 4.0以上）が必要ですが、これは無償で配布されており容易に入手することができます。



マニュアルの作成

冊子体からCD-ROMの出版に替え、投稿論文はすべてPDFによる提出に変更しましたが、投稿者のパソコン環境によりPDFの品質が左右され、環境が異なると原稿どおりに表示がされなかったり、タイプの異なるフォントで表示されることが多く発生し、これに対処するために、また、初めてPDFで投稿される方のために、投稿用PDF作成のためのオンライン・マニュアルの作成に着手しています。

工学部図書・研究報告委員会の電子情報対策ワーキングのメンバーにTeaching Assistant（TA）の大学院生を交えて検討し、彼ら大学院生が作成しているもので、これにより、どの投稿者も同じ品質のPDFの論文を提出できるように図っています。

今後の課題

「山口大学工学部研究報告」を冊子体からホームページとCD-ROMに切り替えたことにより、出版経費の節減、狭隘になっている書庫への対応、インターネットを介して館外からの閲覧利用などが実現しました。今後の課題としては、著作権の取扱い、継続的なサービスを提供するための要員の養成と機器の維持管理、また、遡及入力と目次データベースの必要性、ノウハウの蓄積と利用などについて、継続して検討していく必要があります。

（工学部分館情報サービス係　あかの・とおる）

本学開館サービスの現状と課題

吉　光　紀　行

利用時間の拡大

附属図書館では、利用者サービス向上のため、学内及び本省の支援を得て、平日の時間外開館の延長と土・日の休日開館の実施に取り組んできた。その経緯は、図書館ホームページから提供している図書館デジタル概要「整備・改善の歩み」に掲載している。

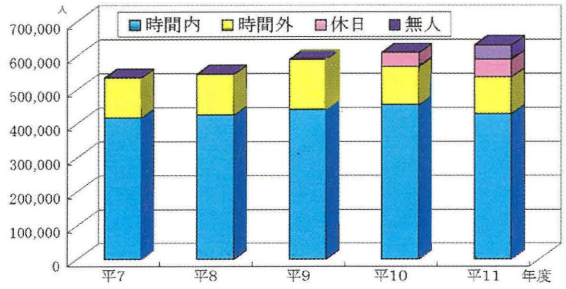
更に、平成９年８月に、本館がまず24時間開館を開始した。平成11年度末、本館、医学部・工学部分館にそれぞれ自動入退館システムが導入され、これを機に12年度4月から両分館においても、24時間開館を開始した。また、10月からは学内の理解を得て、本館、両分館ともに休日開館を拡大した。

現在、時間外開館は、本館20時、医学部分館21時30分、工学部分館22時まで、休日開館は3館とも９時～17時まで実施している。

利用者の動向

平成11年度は本・分館で延べ約63万人の利用があり、このうち時間外開館は107,814人、休日開館51,869人、無人開館42,155人（96%は医学部分館の利用）であった。月別傾向では２月の試験期が最高で78,620人、館別の最多入館者数は、本館37,976人（9月）、医学部分館21,196人（2月）、工学部分館24,256人（9月）である。利用者の約96%は学生で、利用対象学生数（院生を含む）は、本館6,104人、医学部分館1,214人、工学部分館3,720人、合計で約11,100人であるから、本・分館とも学習図書館として学生に大いに活用され、その点でも図書館が果たしている意義は大きい。

＜入館者推移＞



グラフから読み取れるように、平成７～11年度の入館者推移は年々増加の傾向にある。これは、時間内開館の入館者はほぼ横這いであるが、休日及び無人開館の実施が、利用者のニーズの多様性に合致したことで、利用が増えたことによる。また、11年度と12年度の入館者数を４月～12月のデータで比較すると、本・分館とも10～26%の増加が認められた。

ユーザーの要望と今後の課題

今年度、附属図書館の自己点検・評価の参考資料とするために行った「図書館利用に関するアンケート調査」によると、平日の開館時間は、大半が「現状でよい」であるが、休日については、本・分館とも、平日と同様の延長を望む声が強い。祝日を含めた年中無休や早朝開館の要望もある。24時間開館についても、医学部分館と同様に、学部学生にも開放を望む声が高い。但し、医学部が実施効果を挙げているのは、学部の理解と支援により、ガイダンスや、夏季・冬季の空調、安全対策を実施していることによる。この点、本・分館を含め、今後利用環境の改善を図る対策が必要である。

以上のような、ユーザーの利用動向と要望を踏まえて、図書館では今後も学内の理解と支援をお願いしながら、開館サービスの向上に努め、学内をはじめ一般市民等の利用者の要請に積極的に応えていきたいと考えている。

（医学部分館情報管理係長　よしみつ・のりゆき）

電子ジャーナルのサービス拡充に向けて

渡　部　哲　夫

おしよせる電子ジャーナル

図書館界で「情報の洪水」ということばがよく使われてきましたが、最近のキーワードとしては電子ジャーナル化の進展があげられます。

昨年開催された第13回国立大学図書館協議会シンポジウム「電子ジャーナルの導入と外国雑誌収集のあり方」の中で、1996年に300誌足らずだった電子ジャーナルが2000年には8000誌に増加し、出版業界や代理店業界の情報では2005年には冊子と電子ジャーナルの比率が逆転すること等の報告があり、学術出版業界においてもＩＴ革命が激しい勢いで浸透しています。

電子ジャーナルの特性

電子ジャーナルには、①冊子体購入に付随した無料のもの、②冊子体価格に上乗せさせたもの、③出版社やベンダーが介在し総合パッケージ化して販売するもの、④冊子体は発行されず電子ジャーナルだけのものがあります。これらには、山口地区・宇部地区のサイト契約の問題，無料から有料に突然切り替わる時，不要な雑誌がパッケージに組み込まれ価格を押し上げる場合，バックナンバーの保障に不安があるなど，電子ジャーナル化への設備投資が価格を高騰させるなどの問題点があります。また、著作権等で契約条件やモラルを逸脱したダウンロードを防止するための啓蒙も必要になります。

一方で、学内の研究室や情報コンセントのパソコンから気軽に利用出来るため図書館へ出向く必要が無くなったり、検索機能を持った総合パッケージでは目指す論文へのアクセス効率を高めるなどメリットも多々あります。また、重複購入を解消し、研究費を有効に使用するための手段にもなりえます。

電子ジャーナルプロジェクトの取り組み

本学では、附属図書館運営委員会の下にワーキングを設置して、共同購入のルール作り等に取り組んだり、学外的には、中国四国地区国立大学「地域コンソーシアム検討部会」に参加するなどしています。平成10年度には電子ジャーナルの導入に着手して、重複雑誌の解消に努め、平成11年度以降は、重複雑誌の現状を公開し、分担・共同購入をさらに進めています。

附属図書館では、これらの経緯を踏まえ、電子ジャーナル化の進展に対応するため、「電子ジャーナルプロジェクト」を立ち上げました。

現在、500誌余りの電子ジャーナルが附属図書館ホームページを通して利用可能ですが、無料のものを中心にタイトル数を伸ばす努力をしています。また、本学の場合、研究費を効率的に運用するためにも、重複購入を解消し分担・共同購入の考え方を取り入れ、電子ジャーナルの活用を図っていくことが大切だと考えます。また、総合パッケージのように高額ではあるが有用なものは、全学的な予算措置が不可欠になってきます。それに対応するため、附属図書館運営委員会等を通じて、必要な情報の提供に努めていきたいと考えています。

外国雑誌の高騰による購入タイトル総数は確実に減少していますが、身近になったといっても電子ジャーナルが価格面でそれを補えるものではありません。ＩＬＬなどを通じて補完せねばならず、利用者の不便と図書館業務量の増加を生じさせています。当プロジェクトでは、各方面からの情報収集や学内の意見を伺いながら、電子ジャーナルを利用者にとって使い勝手の良いものへと進めて行きたいと思います。

（電子情報係長　わたなべ・てつお）

トピックス

専門教育導入図書を充実(学長裁量経費)

今年度、附属図書館の学生用図書支援事業として、学長裁量経費から500万円の予算措置を受け、小嶋館長の発案で、専門教育導入図書の充実を図ることになりました。入学後間もない学生に対し学ぶこと、考えることに興味を持ち、勉学への意欲を高めるとともに、啓蒙書とし活用されることを目的としたもので、初めての試みです。図書の選定は、全学の教官に依頼し、1,800冊強の推薦図書が、整理のすんだものから本館2階に設けた専用のコーナーに配架されています。

自動貸出返却装置を導入(学長裁量経費)
－工学部分館－

工学部分館では、学長裁量経費の配分を受け、図書自動貸出返却装置（Automatic Book Cerculation、通称ABC）が導入され、平成13年度から運用が開始されます。現在、本館と医学部分館には、図書自動貸出装置(Patron Self Check 通称PSC）が設置されています。ABC装置は、利用者自ら図書や雑誌の貸出とともに返却処理を行うことができます。カウンターの混雑時や職員の不在時、また24時間開館（無人開館）の時間帯での活用が期待されています。

遡及入力事業を実施（学長裁量経費）

本館では10年前から目録データの遡及入力に取り組み、現在、吉田地区にある約122万冊の図書・雑誌の約３分の１の情報を、OPACデータベースで提供しており、ホームページを介して検索することができるようになっています。しかし、1981年以前に受け入れた図書・雑誌の大半、そして本学の特色でもある6万冊の中国語図書等は、まだ図書館でカード目録を繰って検索するほかありません。また、データベース内には、機械化当初に入力した不完全データが残っています。

今年度はOPACの書誌情報や学内所蔵情報を充実するため、学長裁量経費の配分を受け、昨年10月から、研究室返却の経済学関連の製本雑誌約13,500冊のデータを入力し、また不完全データを無くすためチェック・修正を行っています。今後も学内のご理解とご協力をいただきながら、遡及入力に力を注ぎ、OPACデータベースの充実に取り組むことにしています。

附属図書館将来検討委員会を設置

平成12年7月21日付けで、附属図書館将来計画の基本方針を策定するため、運営委員会のもとに、館長を委員長とし、分館長、運営委員、事務部長をメンバーとする「山口大学附属図書館将来計画検討委員会」が発足しました。現在、大学の理念に基づく、図書館の理念、目標等について、検討・審議が行われています。

自己点検・評価アンケート調査を実施

附属図書館では、今年度の重点事業の一つとして、附属図書館自己点検･評価委員会のもとに、新たに「同小委員会」を設け、自己点検・評価に取り組んでいます。今年度は、その基礎作業として、「附属図書館利用に関するアンケート」

を実施しました。対象は、全学の教官、学生、一般市民で、学生については授業担当教官の協力を得ました。回収率は平均で教官55%、学生24%、一般市民（館内配布）34%でした。現在、自己点検・評価小委員会でアンケートの内容分析と報告書の作成を進めています。

附属図書館広報委員会を設置

平成13年1月1日付けで、附属図書館の館報、ホームページ、概要等の広報活動の方針、並びに情報公開法施行への対応等を検討・審議するため、館長を委員長とし、医・工分館長、運営委員2名、部課長をメンバーとする広報委員会が発足しました。この委員会のもとに新たに事務系職員による附属図書館広報編集委員会をおき、従来の広報委員会要綱を廃止しました。

附属図書館諸規則を改正

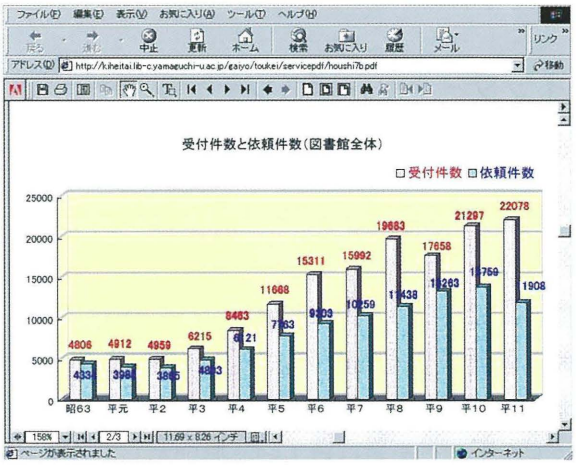
今年度、本学の大学改革の一環として推進されている全学委員会再編成に伴い、附属図書館運営委員会は、情報環境整備専門委員会、総合情報処理センター運営委員会とともに、知識情報委員会（基本委員会の一つ）を構成する専門委員会の位置付けとなりました。また、13年4月1日付けの施行のもとに、山口大学附属図書館規則、山口大学附属図書館館長選考規則、山口大学附属図書館運営委員会規則が改正されました。なお、これに伴い山口大学附属図書館運営委員会選考規則を廃止しました。

図書館活動情報データベースを公開

本誌の特集記事でとりあげた本データベースは、平成12年度21世紀の幕開けに公開することをめざして全館をあげて取り組んだ事業で、図書館職員の自力によるデジタルコンテンツの作成と発信です。同時にホームページのリメイクに取り組んでいますが、本学では、13年度から学生一人一人がノートパソコンを持つことになるので、情報リテラシー教育に図書館のデジタルコンテンツが活用されることをめざしています。

デジタル概要を公開

図書館活動情報データベースのデジタル概要で力を注いだのは、統計調査で、文部省大学図書館実態調査をすべて入力しています。公開中のものは、平成元年以降のものですが、今後、昭和40年以降の全データをすべて入力してデジタル化し、適宜グラフ化し、情報公開に備える予定で進めています。但し、入館統計は、実態調査項目にないため、本学独自の調査項目によるデータを表示しています。また、12年度以降の新データの入力・集計フォーマットも作成し、作業の効率化を図りました。



7-7b 図書館間相互協力：文献複写（調査年度実績）

調査年度	館別／年度計	文献複写 受付件数（件） 国内 大学図書館	国内 その他	国外	計	依頼件数（件） 国内 大学図書館	国内 その他	国外
昭和63年度（1988）	本館	1,296	168	0	1,464	2,284	23	36
	医学部分館	2,501	0	0	2,501	823	0	2
	工学部分館	536	305	0	841	901	252	13
	計	4,333	473	0	4,806	4,008	275	51
平成元年度（1989）	本館	1,319	236	0	1,555	2,081	21	28
	医学部分館	2,534	13	0	2,547	863	0	1
	工学部分館	806	4	0	810	787	196	8
	計	4,659	253	0	4,912	3,731	217	37
平成2年度（1990）	本館	1,475	26	0	1,501	2,082	39	17
	医学部分館	2,552	26	0	2,578	846	3	0
	工学部分館	822	58	0	880	721	156	1
	計	4,849	110	0	4,959	3,649	198	18
平成3年度（1991）	本館	2,028	8	0	2,036	2,614	117	27
	医学部分館	3,007	149	0	3,156	1,026	11	0
	工学部分館	940	83	0	1,023	863	140	5
	計	5,975	240	0	6,215	4,503	268	32
平成4年度	本館	2,814	14	0	2,828	3,472	30	47
	医学部分館	3,945	196	0	4,141	1,243	152	0

笹川部長を招き学術講演会を開催
－山口県図書館職員研修会－

昨年12月７日、富山大学附属図書館の笹川郁夫事務部長を講師に招き、「情報化に向けて」と題して、山口県図書館協会、山口県大学図書館協議会との共催で学術講演会を開催しました。

笹川部長は、わが国のミレニアムプロジェクトや、電子政府政策、米国等から要請されている国際アクセスの課題を紹介し、大学図書館が21世紀のＩＴ社会のもとで高等教育の向上に貢献していくために、今世紀飛躍的に発展・浸透してきた情報技術・システムを、利用者の立場に立っていかに活用・応用するかについて、ＩＣカードや、携帯情報端末（ｉモード）による蔵書検索サービス等を例に、豊富な経験に基づき講演しました。講演会には、学内教職員や県内の大学・高専図書館職員等約50名が参加しました。

インターネットでコンテンツサービス
－医学部分館－

平成13年１月より、医学部分館ホームページから、医学部購入和雑誌のうち、100タイトルについて、学内ＬＡＮを使って簡単な操作で目次を閲覧できるコンテンツサービスを開始しました。提供データは、2000年発行以降の和雑誌で、データ更新は週１回、原則として月曜日に行います。ユーザーは、学内だけでなく、地域の医療機関従事者にも広がっています。

24時間開館（無人）の登録状況

本学の24時間開館の実状と課題については、「現代の図書館」（vol. 37 no. 4，1999. 12）が特集した“図書館の「開館」を問う”において、本学吉光紀行医学部分館情報管理係長が報告論文「24時間開館サービスの取り組みと利用動向について」（p. 227-233）で詳細を述べています。11年度の状況は本誌の記事で触れていますが、12年度の利用登録者数（1月9日現在）は、全学で1，879人、そのうち1，500人余は、学部学生にも開放している医学部分館の学生で、75％の登録率です。

＜特別利用申請登録者＞

区分		利用対象者数	利用登録者数(人)	登録率(%)
本館	教職員	419	82	19.57
	院生	558	77	13.80
小計		977	159	16.27
医学部分館	教職員	860	604	70.23
	院生	278	130	46.76
	学生	870	778	89.43
小計		2,008	1,512	75.30
工学部分館	教職員	210	58	27.62
	院生	878	150	17.08
小計		1,088	208	19.12
合計		4,073	1,879	46.13

情報公開法施行への対応

本学の情報公開準備委員会のもとで、13年度からの大学情報の公開に向けて、附属図書館行政文書について、本館、医･工分館を含め、分類基準表の作成と行政文書ファイル管理簿（データベース）を作成しました。現在、公開実施にむけて諸準備を行っています。

図書館報をリメイク

前号から図書館報の紙面のリメイクを行い、利用者の要望により発行部数を増部しましたが、本号では、本館資料サービス係の宇都宮麻衣さんのデザインにより、装いを一新しました。

図書館活動情報データベースも全体にわたり宇都宮さんのデザインによるものです。

本学関係教官著作寄贈図書

寄贈者	著者名	書名
名島　潤慈（教育学部）	名島潤慈著	夢分析における臨床的介入投法に関する研究
末松　　壽（人文学部）	ヴィクトール・セガレン著、末松壽訳	記憶なき人々
纐纈　　厚（人文学部）	纐纈厚［ほか］編	日米保安・戦争責任・反戦平和を語る：講演録集
澤　喜司郎（経済学部）	澤喜司郎著	交通変革への視点
岩尾　康宏（理学部）	J.J.Tarin,A.Cano(eds.)	Fertilization in pritozoan Animals
入不二基義（教育学部）	入不二基義著	相対主義の極北
貞方　　昇（教育学部）	貞方昇著	中国地方における鉄穴(かんな)流しによる地形環境変貌

平成12年度特別図書購入一覧

選定学部	著者名	書名	出版社
人文学部	山下武監修	第Ⅱ期エミール・ゾラ選集「ルーゴン=マッカール叢書セレクション」	本の友社
人文学部	陳慶浩・王秋桂聰編	中国民間故事全集	遠流出版事業股分有限公司
人文学部		大正・昭和下層社会記録文献集成	本の友社
人文学部	毎日新聞社「至宝」委員会	東山御文庫御物	毎日新聞社
教育学部		European joumal of women's studies. Vol-6	Sage publications
教育学部	川村博忠［ほか］編	江戸幕府撰；慶長国絵図集成	柏書房
経済学部	ed. by John R. Edwards	The history of accounting	Routledge
経済学部		Annual report of the President of the United States on the trade agreements program	William S. Hein

会　議

● 学　外

平12. 9.12　山口県域総合目録システム検討委員会（於：山口県立図書館）

9.28　第２回山口県図書館協会理事会（於：山口県立図書館）
- 図書館政策委員会の設置について

10.19-20　日本医学図書館協会中国四国部会総会（於：広島大学）

12. 5　中国四国地区国立大学附属図書館事務部課長会議（於：岡山大学）
- 教育改善推進費（学長裁量経費）の図書館への配分状況等
- これからの図書館活動に要する基盤経費の確保方策

平13. 1.25　平成12年度附属図書館事務部長会議（於：徳島大学）
- 第10次定員削減下における大学図書館の組織体制－主に部制の在り方
- 新たな図書館経営体制に向けて－大学図書館の生き残り戦略－

● 学　内

平12. 9.18　企画懇談会（於：医分館）

9.25　第5回資料選定委員会

9.26　第94回附属図書館運営委員会
- 平成12年度附属図書館予算（案）
- 平成13年度学内予算要求の方針
- 平成13年度科学研究費補助金の申請
- 附属図書館広報委員会の改組

10. 4　第２回附属図書館自己点検・評価小委員会

10. 5　第４回図書・研究報告委員会（工分館）

10.13　第２回SMAT定例会（医学部分館）

10.17　企画懇談会（於：工分館）

10.24　第95回附属図書館運営委員会
- 平成14年度概算要求事項
- 学長裁量経費による学生用図書選定
- 全学委員会再編に伴う運営委員会規則改正

第1回附属図書館将来計画検討委員会

10.25　第6回資料選定委員会

10.30　第2回附属図書館将来計画検討委員会

11. 8　第２回医学分館図書委員会

11. 9　第４回図書・研究報告委員会（工分館）

11.13　企画懇談会（於：工分館）
11.22　第7回資料選定委員会
11.29　第3回附属図書館将来計画検討委員会
第96回附属図書館運営委員会
・平成14年度概算要求
・平成13年度営繕要求事項
・学内基本委員会規則（案）等
12. 8　第1回附属図書館広報委員会（旧）
12.13　第8回資料選定委員会
12.15　企画懇談会
12.19　第1回附属図書館広報委員会（新）
第97回附属図書館運営委員会
・山口大学附属図書館規則の改正
・山口大学附属図書館運営委員会規則の改正
・山口大学附属図書館運営委員会委員選考規則の廃止

平13. 1.11　第7回デジタル概要プロジェクト
1.17　第9回資料選定委員会
1.19　企画懇談会
1.29　第98回附属図書館運営委員会
・平成13年度時間外・休日開館
・平成13年度附属図書館資料費・管理運営費基盤経費化要求
・山口大学附属図書館文献複写料金徴収猶予の許可に関する細則の一部改正
2. 6　第4回附属図書館自己点検・評価小委員会
企画懇談会
2.14　第10回資料選定委員会
2.23　第99回附属図書館運営委員会
・附属図書館の理念・目標等
・平成13年度附属図書館資料費・管理運営費の基盤経費化要求

研　修

平12.10. 2-6　漢籍担当職員講習会（京都大学）
参加者：江見伸子目録情報係長
10.12-13　国立大学中国四国地区実務者会議（広島大学）
参加者：渡部哲夫電子情報係長
10.25-27　第41回中国四国地区大学図書館研究集会（徳島大学）
参加者：岡田隆情報サービス係長
田中俊二情報サービス係員(医)
赤野徹情報サービス係員(工)
10.30-11.2　山口大学JST（基本コース）研修
参加者：江見伸子目録情報係長
岡田隆情報サービス係長
11.6-9　大学図書館職員講習会（京都大学）
参加者：髙田美栄子総務係員
11.11-12　第２回図書館振興県民の集い(山口県立図書館)
参加者：上田専門員ほか
11.17　平成12年度新CAT／ILLシステム説明会（九州大学）
参加者：岡田隆情報サービス係長
12.7-8　第13回国立大学図書館協議会シンポジウム（名古屋大学）
参加者：三浦博士資料受入係長

編集後記

当館は21世紀を迎え、新しい大学図書館を目指して種々取組み中です。本誌の「トピックス」にもありますように、第一は、附属図書館としての理念・目標の策定、第二は、初めて本格的に行う附属図書館の自己点検・評価がその主要なものです。これからの大学図書館は、当該大学で進められている大学改革や、本省等で既に具体的検討に入っている国立大学の独法化について、今までの対応努力に加えて、更に積極的・弾力的な対応を求められることになるでしょう。

このような対応とは別に、大学図書館についてもっと知ってもらうために、学内外の利用者や地域社会の人々に対しての広報活動も大切なことと思っております。今後とも、当館に対する益々のご支援をお願いいたします。（事務部長・竹若重勝）

山口大学附属図書館報　「Library News」
Vol.21 No.3（通巻63号）　2001年３月27日発行
http://home1.lib-c.yamaguchi-u.ac.jp/
編集・発行　山口大学附属図書館広報編集委員会
〒753-8516　山口市大字吉田１６７７－１
TEL.　(083)-933-5183　FAX.　(083)-933-5186